

井川に生きる子どもたち：  
呼び醒ませ、てしゃまんく魂

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文学部社会学科文化人類学コース 公開日: 2011-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 久仁子, 鈴木, 誉子, 川口, 枝里子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/6330">http://hdl.handle.net/10297/6330</a>

## 井川に生きる子どもたち

～呼び醒ませ、てしまんく魂～

鈴木 久仁子、鈴木 誉子、川口 枝里子

はじめに

### 1 「限界集落」井川の過疎化・少子化の変遷

#### 1.1 井川の過疎化・少子化の原因と現状の課題

#### 1.2 井川教育環境

### 2 子どもをめぐる三つの立場

#### 2.1 地域の視点～村心と親心～

#### 2.2 親の視点～愛情とたくましさ～

#### 2.3 子どもの視点～故郷に帰れない子どもたち～

### 3 おわりに

#### 3.1 第四の立場

#### 3.2 井川を巣立った井川っ子

#### 3.3 井川よ、てしまんく魂へ還れ！

はじめに

現在日本は、少子高齢化の社会と言われている。都市部への人口流出により、特に地方の中山間地域の少子高齢化の進行は著しい。人口上の問題を抱える今日の日本において、少子高齢化という社会状況の実情を把握し、子どもをめぐる環境や価値観を明らかにした上で、今後の課題や展望について考察することには大きな意義がある。なぜならば、子どもは未来を象徴する存在であるため、子どもの置かれている現状や子どもをめぐるさまざまな価値観を知ることが、少子高齢化・過疎化の進む日本の未来を見通す一助となると考えるからである。

統計上の総人口数も子どもの数も年々減り続けている地域はいわゆる「過疎地域」とみることができるが(長谷川 1997:243)、今回の実習の調査地となった井川は、少子高齢化・過疎化の地域の一つとしてとらえることができるのではないだろうか。そこで、今回の調査目的を、井川における子どもをめぐる環境・価値観の特殊性を明らかにし、調査結果を踏まえた上で少子高齢化・過疎化地域の今後のあり方について考察することとした。本論文では、井川のさまざまな立場の人にインタビューを行い、多角的な視点を取り入れることを通して、井川に生きる子どもの姿を浮かび上がらせることを重視した。

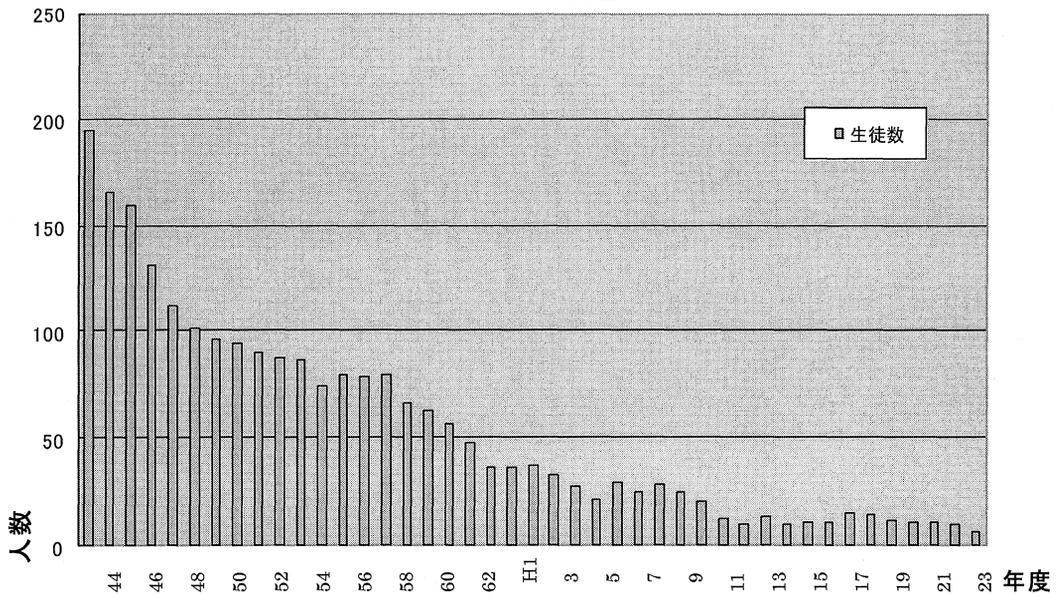
なお、本論文における「子ども」の定義は、「幼稚園生から中学生までの子ども」とする。ただし、聞き取り調査で実際に話を聞くことができたのは小学生と中学生のみである。また、「子どもたち」という表現は静岡県の一部地域で使われている方言で「子どもたち」を意味する言葉である。(鈴木 久仁子)

### 1 「限界集落」井川の過疎化・少子化の変遷

かつて「陸の孤島」とよばれた井川は、現在住民の50%以上が65歳以上であり、村の維持が限界に近づいている。こうした村落は、一般に「限界集落」と呼ばれている。井川における人口のピーク(昭和28年～平成22年)は昭和35年の5574人である。それ以後、人口・世帯数ともに徐々に減少し続け、平成7年には初めて1000人を切り、昨平成22年度には総人口631人とピーク時の約9分の1にまで減ってしまった。

総人口の減少に伴って、少子化も進行し続けていった。井川中学校の月見里校長よりいただいた生徒数の変遷資料(図1・表1)によると、昭和44年には195人いた中学生であるが年々減少の一途をたどり、昭和50年には100人を切り、平成23年現在は6人にまで減少した。今後数年間の井川小・中学校の生徒数は一進一退を繰り返し、2年後の平成25年には小中学生合わせて8人になり二桁を割ってしまう。

図1 生徒数の変遷



年度	S44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1
生徒数	195	166	160	131	112	101	96	94	90	87	86	74	79	78	79	66	62	56	47	36	36
2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
37	32	27	21	29	24	28	24	20	12	9	13	9	10	10	15	14	11	10	10	9	6

資料提供：井川中学校校長 月見里茂希氏

こうした少子化の深刻化によって、教育現場は、具体的に小中学校存続の危機に瀕している。小中学校は義務教育であるため、廃校はまぬかれたとしても、クラスに生徒が 1 人しかいない状況が日常化することは目に見えている。さらに、このままいけば平成 28 年度には中学生がたったの 1 人しか存在しないことになってしまうのだ。こうした状況下においては、たとえ学校が存続したとしても、教育の面でさまざまな弊害が生じてくることは火を見るより明らかである。

### 1.1 井川の過疎化・少子化の原因と現状の課題

上では具体的な人口数値とともに、井川の過疎化・少子化の実態を明らかにしていった。ここでは、井川における過疎化・少子化の原因を、一般に言われる過疎化・少子化の条件と照らし合わせて見ていく。

原俊彦は、過疎地域の本質的要素として「人口流出」・「高齢化」・「少子化」の三つをあげ、これらの要素の複雑な因果関係について語っている。原によると、日本に典型的に見られる、人口が半減してしまうような激しい人口減少や極端な少子化、高齢化現象は「人口流出」と「出生力の低下」、医療の発達などに伴う「長寿化」がすべて同時進行する場合に発生するという。すなわち、過疎化現象は「人口流出」による人口構造の不均衡化が日本全体で進行している「低出生力化」・「長寿化傾向」によりさらに増幅されて発生するということである(原 1994:4,10)。

果たして、井川のケースにおいてこれらの理論は成り立つのだろうか。

井川の人口動態の大きな転機は、やはり井川ダム建設であろう。昭和 28 年に着工し、5 年後の 32 年に完成した井川ダム建設に伴い、当時 550 戸あった井川村の戸数の 3 分の 1 以上に及ぶ 193 戸の住居が水没することとなった。そして、多くの住民がダム建設による補償金を手に街へ出て行く選択をすることとなった。ダム建設を契機とする井川の「人口流出」は、同時に生産年齢人口の減少を引き起こし、少子化につながった。また、日本全体の「長寿化」の傾向とあいまって、井川も例に洩れず、原の主張するような過疎化・少子化のプロセスをたどっていったことがわかる。

さらに、ダム建設終了後も引き続き過疎化・少子化が進行していったのには、ほかにも理由があったのだ。調査をする中で井川村の誰もが口をそろえて語ってくれたのが、「(終身)雇用環境」不備の問題であった。井川には、若い労働人口を抱えていけるだけの職がないのが現状なのだ。井川の主要産業である土木・林業は現在頭打ちし、民宿や商店の経営もそれだけで食べていくには厳しい状況であるようだ。保育園などの教員職も非正規の雇用でまかなっている部分も多く、なかなか安定した仕事を持つことが困難な状況となっている。仕事がなければ、若者たちも井川に帰ってくることができず、人は街に出て行く一方である。また、合わせて交通の便の悪さもよく指摘されたが、こうした生活上の困難が人の足を井川から遠ざける要因となっているということがわかる。これが現在の井川の過疎

化・少子化の主要な課題である。

しかし、井川の人々も決してこの問題をなおざりにしてきたわけではないのだ。かつて井川でも過疎化・少子化対策を講じた時期があった。ある女性(70代)は、井川における「里子制度」について語ってくれた。これは、井川の少子化を食い止めるため、都会の学校で登校拒否などの問題を抱えるようになった子どもたちを井川村に迎えて育てようという取り組みであった。この制度を通じて井川の学校を巣立っていった子どもの中には、お世話になった里親を自分の結婚式に招待するなど、里子制度の成功を思わせるような結果も表れている。しかし、受け入れる子どもによっては村人を困らせたり、また村人側でも「(よその子ではなく)村の子の教育を一番にしてほしい」と願い出る人がいたりするなど互いに確執が生じ、結局里子制度は頓挫してしまった。こうした村人のさまざまな努力の結果として、現在の状況があることは間違いない。現在村人の多くは、現状に対してあきらめの気持ちを持ちを隠し切れずにいる。その背景には、今に至るまでの多くの苦労が隠されていることを私たちは忘れてはならない。

## 1.2 井川の教育環境

平成23年現在、井川には幼稚園生4名、小学生5名、中学生6名の子どもたちが住んでいる。幼少中あわせて15人という超少人数教育が行われている井川には、他地域では見られない特殊な教育環境が存在している。一番大きい特徴といえるのは、高校が存在しないということだろう。すなわち、井川で育つ子どもたちはみんな、中学卒業と同時にふるさと井川を出ていかなければならないということを意味している。井川の子どもたちのほとんどは中学卒業後、静岡市内に存在する山間部出身者用の寮に住み、そこから高校に通うようになる。平日は市内で過ごし、休日や部活動のない日には井川に帰ってくるという学生も少なくない。中には子供に合わせて一家で街に引っ越すということもあるようだが、かなりまれな例となっている。



写真1 井川幼稚園の皆さんと



写真2 幼小中ふれあい活動の様子

井川の教育のもう一つの特徴として、幼小中の異年齢集団(3～15歳)による多彩な学習や行事などが挙げられる。上で記したように、井川には本当に子どもが少ない。そのため、少しでも多くの人材での教育機会を増やすため、井川幼稚園・井川小学校・井川中学校は互いに緊密に連携を取り合っている。たとえば、幼稚園生は昼食の時間になると園から徒歩10分ほどのところにある小学校に赴き、毎日小学生のお兄さん・お姉さんと一緒に給食を食べている。この他にも、中学校の生徒会が中心になって企画・運営する「幼小中ふれあい活動」などのイベントを通して、街の学校ではなかなか体験することのできない幅広い年齢層での交流の場がもたれている。井川という閉鎖的な地域に住む子どもたちはお互いに生まれたときからずっと顔なじみではあるが、異年齢集団での取り組みの中で、自然と縦の関係を身につけていくようであった。加えて、他の学校との交流授業も頻繁に行われており、同年齢の子どもたちとふれあう機会を積極的に作ることで、少人数教育では味わえない経験を補えるように努力している。

## 2 子どもをめぐる三つの立場

ここからは、子どもをめぐる多様な価値観に焦点を当てて見ていこう。私たちが実際に井川の地に赴き、そこでさまざまな方にインタビューをしていく中で、井川の子どもをめぐる見方として、大きく分けて三つの立場があることがわかってきた。ここでは、それらを「地域の視点」・「親の視点」・「子どもの視点」の三つの立場に分けて、それぞれの立場がどのように子どもたちと関わり、またどのような思いを抱いているのかをまとめていきたい。

### 2.1 地域の視点～村心と親心～

はじめに、「地域の視点」から見ていきたい。ここでいう「地域」とは、井川在住の中学生以上の人(非就学者)で、現在高校生までの子どもを持たない人を指す。すなわち、ここでは子ども(幼稚園～中学生)を抱える親は除かれるということである。また、井川の教職員に関しては「第四の立場」として後ほど取り上げるため、ここでは触れないことにする。

私たちが井川で調査を進める中で、先ほど定義した「地域」の視点として、主に二つの思いが存在していると感じることができた。ここではその二つの思いをそれぞれ「村心」と「親心」と名づけて考察していきたい。

はじめに「村心」について見ていこう。

「村心」とは、ここでは井川の現状をなんとか打開していかなければならないという一種の責任感にも似た感情のことを指している。この「村心」が子どもたちに向く場合に「子どもたちに井川に残ってほしい」、「井川に帰ってきてほしい」という思いになる。現状に対して「考えても解決しない」、「なるようにしかならない」、「時が来たら考えよう」というあきらめに近い思いを抱えている人も多いが、どの人も程度の差こそあれ、心の底では

みんな「井川を何とかしなくては」と思っていることがインタビューを通して伝わってきた。実際、村人の集まりにおいて、今でも水面下でぼつりぼつりと井川再建の案が持ち出されているということを知った。望月倫久氏(39)によると、「今はみんな時をうかがっているのだ」という。私はなるほど、と思った。今の井川の地域住民は、さまざまな解決策や井川再建にむけての体力を蓄えながら、じっと時を待っているのかもしれない。

次に、「地域」のもう一つの思いである「親心」について見ていこう。ここにおける「親心」とは文字通り「地域」住民の、子どもを思う親のような感情のことを指している。すなわち、子どもたちに井川にとどまってほしいという「村心」とは対照的に、地域の宝物としての子どもたちには「好きなことをやらせてあげたい」、「この現状で帰ってきて子どもがかわいそう」、「無理に帰って来なくてもいい」といった消極的な思いを含んでいる。さきほどの「村心」が井川存続をメインにしていたのに対して、「親心」では子どもの幸せに一番の重きが置かれている。



写真3 井川の地域バレーサークル「アルバトロス」の皆さんと



写真4 井川の地域バドミントンサークル「IBC」の皆さんと

ここでいう「親心」には、子どもを思うゆえに子どもたちが街に出て行くのを「仕方のないこと」と捉える思いだけではなく、井川の子どもたちが将来井川に帰ってこられる環境を整えてあげたいという思いも同時に存在していることを忘れてはならない。実際に、子どもたちと未来の井川のためにアクションを起こしている人も少なくない。たとえば今年、井川の森林組合では井川出身の若者を新たに数名採用し、次世代育成に励んでいるという。こうした取り組みは一見小さなものに見えるかもしれないが、積み重ねていけば、必ずいつか実を結ぶときが来る。

こんな話を聞いたことがある。

現在高校2年生と中学2年生の子どもを抱えるA氏夫妻(30代後半～40代前半)は、夫の両親が働き口(飲食店)を準備してくれたことをきっかけとして井川にUターンすることになった。同様に、現在小学生の子どもを3人抱える滝浪氏夫妻(ともに40代前半)は、夫の両親が続けてきた民宿を継ぐ形で井川に戻ってきた。

井川の子どもの大半が、井川に仕事がないという理由で将来街に住むことを選ばざるをえない状況の中、「地域」の取り組みが未来を照らす一筋の光となっていくことを心から願ってやまない。こうした「地域」の愛情に育まれて、井川の子どもたちはすくすくと大きく成長していくのである。(鈴木 誉子)

## 2.2 親の視点～愛情とたくましさ～

つぎに、井川で子育てを行っている親に焦点を当ててみよう。

第一節「井川の教育環境」で見たように、井川の子どもを取り巻く環境は特殊である。特に子どもの数が極端に少ないことと、中学卒業と同時に子どもを街に送らなければならないという二つの特徴は、井川で子育てをする家庭に何らかの影響を与えていると考えられる。これらを踏まえたうえで、井川での子育ての現状や、子どもの将来に対する親の思いを調査すべく、現在小学生～中学生の子どもをもつ母親三人(ともに30代後半～40代前半)にインタビューを行った。その内容を以下で紹介する。

### 井川における子育てに関して

どの家庭でも共通して、「街での子育て・井川での子育て両方に一長一短があり、また、個人によっても向き不向きはある」と大らかに構えている様子が印象的だった。

井川では地域の人々が子どものことを見守ってくれており、「地域全体で育ててもらっている」という感覚があるため、苦労は少ないという。忙しいときに子どもの面倒を見てくれる人や、何かあった時に相談に乗ってくれる人もいる。村人と子どもの間では日常的に気持ちの良い挨拶が交わされており、犯罪に巻き込まれる等の心配をする必要もない。学校では、丁寧で綿密、一人ひとりに行き届いた手厚い教育を行ってくれている。放課後は開校時間いっぱいまで学校に残って遊ぶことが日課となっている。これは生徒同士の家の

距離が開いているため、一度家に帰ってしまうと一緒に遊ぶことができなくなってしまうためだが、学校で遊んでいてくれるのなら親も安心だという。

また、子ども同士だけでなく、母親同士の交流も深いことが分かった。数は少ないにしても、同じように子育てをしている仲間がいることはやはり心強いことであるようだ。母親同士の絆づくりを、幼稚園教諭の滝浪秋代氏（56）は推奨していた。井川幼稚園では週に2回、保護者懇談会が開かれており、園児の母親たちが子育ての相談や意見の交換をしあう場となっている。滝浪秋代氏は、ある内向的な母親に、自ら積極的に他の保護者と交流することを後押ししたそうだ。後日、その母親は自宅に子どもたちとその保護者を招き、交流の機会をもつことができたという。外部から井川に来た母親も、同様に幼稚園等を通じて、お互いに協力し合い、助け合うことのできる関係を築いていくといった様子が見えた。

上記のように、街と比較して、安全で地域間のコミュニケーションがしっかりと成り立っている井川での子育てであるが、子どもの人数が少ないということは、やはり喜ばしい環境であるとは言えない面もある。休日や長期休暇中には、気軽に友人と遊ぶことができず、親の目から見ても不憫に思うことがあるそうだ。日ごろ競い合う相手が少ないことに対する不安もある。実際に、小学校で行われる体力測定一つをとっても、井川小学校の生徒のみで行ったときと、近隣の小学校と合同で行ったときでは、後者の方が記録が伸びるという違いがみられたという。また、子どもが街の高校に進学することへの不安を語ってくれた母親もいた。寮での共同生活がうまくいかなかったり、大人数の学校になかなか馴染めなかったりすることもあるという。その子どもの様子を毎日側で見守ることができないのは、親にとって辛く、もどかしいものであるようだ。

しかし、「かわいそう」という思いだけでは子どもは育てられないという。どの家庭でも子どものために、最大限できることをしてあげたいという親としての共通点が見られた。たとえば、授業参観などの学校行事や、地域のイベント・スポーツ教室などには、子どもとともに積極的に参加している姿が印象的だった。そのほかにも、街の知人の家に子どもを連れて行き、子ども同士で遊ばせたり、街まで習い事に通わせたりと、村の外部との交流の機会を作ることに力を入れているようだった。子どもが高校に進学するときまでに、大勢の人の中に入ることに慣れさせ、ある程度自立できるようにしてあげたいという強い思いが感じられた。

### 子どもの将来に関して

先の事はまだわからない、街に出ていくか、村に残るかも現時点では全くわからないというのが現状である。12歳の子供を持つ宮崎明子氏（40代）は、子どもに対して特に願いはなく、ただただ「たくましく生きてくれ」と語っていたのが印象的だった。7歳、9歳、11歳の子供を持つ滝浪美奈子氏（40代）は、村に戻ってこいとは言えない、戻ってきてほしいという思いもあるが、子ども自身のことを思うと好きなことをさせてあげたいという

気持ちがある、と語っていた。やはり、子どもの将来に関する決定も、本人の意思を尊重してあげたいという考えがあるのはどの家庭でも共通しているようだ。

また、今回のフィールドワーク全体を通して、「子どもが井川に戻ってきたいと思っても、働く場所がない」という意見を多数耳にした。その中で、14歳の子どもをもつA氏夫妻の「働く場所がないなら作ればいい」という言葉は新鮮に感じられた。働く場所を作ることができるというケースは特殊ではあるかもしれないが、そのくらいの気概をもって子育てに臨んでいくことは、子ども自身の意思を尊重することにつながるのではないかと思った。

井川で子育てをしていて、時には「井川に長くとどまってほしい」という地域からの期待を感じることもあるという。滝波美奈子氏は以前、冗談で「井川を出て行こうかな」と言ったことがあったそうだ。後日、その言葉があつという間に村中に広まっていることを知り、驚いたというエピソードを話してくれた。若い世代の世帯数の少ない井川では、一家族の決定が、今後の新たな世代や村全体に大きな影響を及ぼしてしまう。身勝手な決断はできないと感じることもあるが、それだけがすべてではないという。実際に子どもを育てるのは親であり、子どもにまつわる責任をもつのも親である。宮崎明子氏は、こう語っている。「子どもは地域の宝である前に親の宝」なのだ。神経質になっては、村ではやっていけない。そういった状況の中で、井川の親たちは自然とたくましさを身につけているように思われた。

以上の調査を通して共通して言えることは、当たり前ではあるがやはりどの家庭でも親から子に対する「愛情」に勝るものはないということだ。子どもによりよく生きてもらいたい、という思いは子育てをする場所や環境には左右されない。街でも井川でも同じように、良いところは生かし、足りないところは工夫して補いながら、親は一生懸命に子どもを育てる。それも子どもへの愛情があるからこそなのだ。特に井川では、「親元を離れる高校生になるまでに、できるだけ自立させたい」「少人数から大人数の場所に行ってもたくましく生きてほしい」という課題が明確であるぶん、親たちは限られた時間の中で精一杯子育てに向き合っていこうとするのだろう。

また、親にとって井川という地域は、一緒に子どもを見守ってくれる温かい存在である。



写真5 インタビュー風景 宮崎明子氏と川口枝里子



写真6 滝波美奈子氏

そのため、地域に対して感謝の気持ちを抱く反面、井川の将来を担う世代への期待が、ときにプレッシャーのように感じられてしまうこともあるようだ。しかし、そのプレッシャーに屈することなく、子どもへの愛情を第一に、前を向いて生きる親たちの姿は、とてもたくましく心強く感じられた。子どもたちはきっと、親のたくましさを受け継ぎ、立派な大人となって、よりよい未来を拓いていくだろう。井川で出会った子どもたちが頼もしく見えた所以はここにあるような気がした。(川口 枝里子)

## 2.3 子どもの視点 ～故郷に帰れない子どもたち～

### 聞き取り調査から

最後に、井川に生きる子どもたちに焦点を当てていきたい。ここでは、子どもたちへのインタビューから明らかになった、当事者である井川っ子たちの井川に対する思いについて述べていく。

私たちは、子どもたちに話を直接聞くため、井川小学校と井川中学校にうかがった。井川小学校では、昼食の時間に幼稚園児と小学生と、そして井川小学校の教職員の方々と一緒に昼食をとった。また、小学生が受ける体育の授業に参加する機会を得ることができた。中学校では、「総合的な学習」の授業をともに受け、中学生と私たち大学生で質問を交換しあい、双方向のやりとりをすることができた。また、井川の幼稚園児・小学生・中学生が交流する「幼小中ふれあい活動」という行事も見学することができた。

小学校と中学校で直接子どもたちと触れ合うことで、井川に生きる子どもたちの気持ちや価値観を垣間見ることができたと感じる。ここからは、子どもたちの話やその様子を見学して気がついたことをもとに、子どもたちの井川への思いについてまとめていく。

小・中学生との昼食時や中学校での総合的な学習の時間を使って、子どもたちに以下の二つの質問を投げかけてみた。一つ目は「井川は好きか」という質問で、二つ目は「将来、井川に住み続けたいと思うか」という質問である。子どもたちからは次のような返答があった。

小学校3年生女子：

井川は好きで、井川の人みんな優しい。また、この時隣の席に座っていた6年生の女子児童から「井川を継ぐか」と聞かれ、他にやることがなかったら井川を継いでもいいと答えていた。

小学校6年生女子：

井川は好き。地域の人たちはみんな仲良しで、地域の人たちと一緒にやる行事がたくさんあって楽しいと感じる。幼稚園児はかわいく、中学生は優しい。将来は、また井川に戻ってきて学校の先生になりたいと考えている。

でも、私が先生になる頃には子どもの数がさらに少なくなっているのだろうなあと思う。

中学校1年生女子：

井川の良いところは、地域の人と子どもの仲が良いことだと思う。朝、地域の人が「いってらっしゃい」と気軽に声をかけてくれるところが温かいと思う。でも、井川には働く場所が少ないので、働く場所が増えてほしい。将来は井川に戻ってきて、井川のために働きたい。

中学校2年生女子：

井川の良いところは、自然に囲まれているところだと思う。街ではなかなか体験できないことも、井川ならできる。また、地域の人たちはみんな仲が良い。井川の改善点は、交通の便だと思う。今は将来井川に帰ってきたいと思うが、自分が高校生・大学生になったら街のほうが良いと思うかもしれない。しかし、井川にはたまに遊びに来たい。

中学校2年生女子：

中学校卒業後は、高校に行きたい。今は、将来街で生活することになるのかな、と考えている。でも、井川は好きだからたまに戻ってきたい。街で生活することになりそうな理由は、井川に仕事がないから。また、井川は物価が高い。無理して井川に居る必要はないと思う。もし生活が不便ではなく、仕事があったら、井川で仕事をしたい。

中学校3年生女子：

今は、井川に10年以上住んでいるから住みやすいが、仕事が無いことを考えると街に行ってしまうのかなと思う。でも、たまには井川に帰ってきたい。交通の便が良くなったら良いと思う。小学校高学年から、授業地域の調べ学習をしているうちに、井川のことを考えるようになった。地域活性化のためには、誰かに任せるのではなく、地域全体で、自分たちでやっていかなければならないと思う。

中学校3年生男子：

自分がやりたい職業はもう決まっていて、将来は街に住みたい。でも、休みのときなどには井川にたまに戻ってきたいと思う。

中学校3年生男子：

夢は、工業系に進むこと。自動車などの製造をしたい。でも、井川には自動車会社はないから、将来は街に出ようと考えている。

以上が、私たちの質問に対する子どもたちの返答である。数少ない子どもたちの返答内容を見てみると、子どもたちが井川に対して持っている思いに関して、いくつかの共通点が見つかった。

一つ目の共通点は、子どもたちはみな「井川」という地域のことが好きであるということだ。多くの子どもが答えた「将来井川を出ていったとしても、たまには戻ってきたい」「地域の生活環境が良ければ井川で働きたい」という思いは、その地域に故郷としての愛着を持っているからこそ生じた思いだと考えられる。地域全体の温かさや人々の仲の良さといった井川の地域性が、子どもたちの地域への愛着と、地域の中で見守られながら伸び伸びと育つ「井川っ子」を生む大きな要因になっているのではないだろうか。

二つ目の共通点は、子どもたちが自分の住んでいる地域の現状をよく理解していて、地域の雇用環境や交通の便、過疎化などに対して問題意識を持っているということである。このことから、井川が好きで将来井川で生活したいが、働き口の乏しさや生活上の不便が理由で定住は難しい、という「故郷に帰れない子どもたち」の姿が浮かび上がってくるだろう。

また、今回の聞き取り調査で、ひとつの興味深い点に気がついた。それは、ある小学校3年生と6年生の女子児童から「継ぐ」という言葉が出てきたことである。地域を「継ぐ」という言葉は、「自分たちは地域の将来を担っていく存在」という意識がなければ出てこない言葉であろう。井川の子どもたちは都市部の子どもたちに比べて、「地域の存続」「地域のあり方」を考える機会と、「地域の構成員」としての意識を持つ機会が多いのだと考えられる。

私たちが小学校の体育の授業や「幼小中ふれあい活動」などの様子を見学していて、ひととき目立ったのは、子どもたちの「縦のつながりの強さ」である。中学生あるいは小学校高学年の子どもが、自分より年下の子どもたちにいろいろなことを教えて面倒をよく見ており、「お兄さん(お姉さん)」のような役割を果たしている様子がうかがえた。学校の体育の授業は全学年の子どもたちで一緒に行い、また、井川では地域の人との合同行事が多いこともあり、子どもたちは自然と異年齢集団の中で育てられる。異年齢の人と関わる機会が多いため、井川の子どもたちは地域の中で、比較的強い縦のつながりを持つことができるのだろう。



写真7 井川中学校の学生との交流（右から調査者  
川口枝里子、鈴木誉子、鈴木久仁子）



写真8 ふれあい活動の司会進行  
も中学生が務める

## 子どもが書いた作文から

ここでは、井川の子どもの心情がよく表現されている、ある女子生徒が書いた作文を紹介する。この作文は昨年、当時小学6年生(現在は中学1年生)の加藤菜々子さんが書いた作文である。作文のテーマは特に定められておらず自由だったが、彼女はテーマとして自分が住む地域である井川を選んだ。以下に、彼女の作文を引用する。

### 「どうなる？井川の未来」

私には、将来の夢があります。それは、私のふるさと、井川に帰ってきて、幼稚園の先生をすることです。私は、小さい子が好きだし、私のふるさと、井川が好きなので、地元の井川で幼稚園の先生をやりたいと思いました。

しかし、今の井川は、人口がじょじょに減ってきています。

事実、今は、幼稚園児三人、小学生五人、中学生九人になっています。

なので、私が大人になって帰って来たとき、誰も住んでいない、さらに静かになっていると思うと、恐いです。

私は、人口が増え、みんな仲が良い、自然が今のままの井川になってほしいです。もし、人口が増え、にぎやかになったら、私はとてもうれしいです。

けれど、うれしい半面[原文ママ]、私は、人数が少ないのも、井川らしくていいんじゃないかと、複雑な心境です。

井川が、このままの井川らしさを残し、活気づかせるには、どうすればいいのでしょうか。

私はこう思います。井川で育ち、高校や、大学に行くために街に出た人が、また井川にもどってくることです。

でも、井川にはあまり職場がありませんし、井川から、街の職場までかようとしても、井川から静岡駅まで約二時間かかります。それに、街に行った人も、それぞれきつと、将来の夢があります。なので、井川に帰ってくるのは無理なのでしょう。

でも、私は、自分が育ってきた井川を、見捨てることはできません。「何としても井川の人口を増やしたい…。いえ、増やさなければならぬのです。」

職場が増えれば、私以外にも、帰ってくる人がいるのでしょうか。子どもが増えれば、帰ってくる人も増えるのでしょうか。

未来は、誰にも分からないし、どうなるかもわかりません。でも、未来を想像し、変えることは、できるのではないのでしょうか。

もし、井川に人がいなくなったり、私の気が変わって、街に住むことになったとしても、絶対に、ふるさと井川のことは忘れないし、ずっと思っています。そして、今、井川から離れて暮らしている人達や、観光で来た人達も、井川のことを忘れないでほしいです。

彼女の作文は以上の通りである。この作文には、彼女の井川に対する思いが表れている。「井川らしさ」を残しつつ、井川の人口を増やしていかなければ——彼女の書いた作文か

らは、故郷への愛着と複雑な心境の狭間で地域の未来を見つめる、子どもなりのまっすぐな視線が感じられる。子どもたちへの聞き取り調査からもわかったことではあるが、井川の子どもたちは井川の現状をよく認識し、問題意識を持っている。都市部に住んでいれば考える機会は少なかったであろう地域の未来について、当事者意識を持って考えているのである。

### 3 おわりに

第二節では、子どもをめぐる三つの立場の視点を見てきた。ここでは、先に見てきた三つの立場のほかに「第四の立場」として、教師の視点と中学卒業後に井川から都市部に移住した人の視点について見ていきたいと思う。

#### 3.1 第四の立場

井川で働く教師の勤務先は、主に幼稚園、小学校とそして、中学校がある。この節では、幼稚園、小学校、中学校のそれぞれに勤める現役教師の方々から聞いた話をもとに、子どもをめぐる教師の視点について考えていく。

はじめに、井川幼稚園で教務主任などいくつかの役職を兼任している滝浪秋代氏(56)に話をうかがった。滝浪秋代氏は井川出身である。2年間ほど県外に出て、再び井川に戻って34年目になり、幼稚園教諭を務めるのは今年で36年になる。

滝浪秋代氏によると、少人数の中でも子ども同士の関係はできあがるが、大勢の子どもの前では恐がり、輪の中に入っていけなくなるのだという。そこで、同年代の子どもたちとふれあう機会をもたせるため、時折他の幼稚園との交流を行っている。



写真9 井川幼稚園の教職員のみなさん（前列左が滝浪秋代氏）

「少人数の井川の子どもたちに『大勢で遊ぶと楽しい』と感じる経験をさせるのは先生

や周りの大人の仕事。地域の人にとって子どもは宝であり、将来地域から出ていく子どもが幸せに生きていく力を大人皆でつけないといけない。不安を抱えながらも一生懸命子育てをしている母親たちを『大丈夫』と後押しすることが、地域や学校の役割でもある」と、滝浪秋代氏は語っていた。

次に、井川小学校の青木克顕校長(50代)にうかがった、井川の子どもの特徴について見ていく。

青木校長によると、井川の子どもは素直で伸び伸びしているという。青木校長が他地域から井川に赴任したとき、井川の地域全体が子どもを大事にしており、まさに「子どもは地域の宝」なのだと感じたという。子どもたちは幼稚園・小学校・中学校の12年間を同じメンバーで上がっていく。井川で教育を行っていく上で、この幼稚園・小学校・中学校の教育連携を大事にしているという。中学卒業後、みな街に下りていくが、それまでに井川での教育によって「自主性」や「自律性」、すなわち自分で身の回りのことができる生活力を子どもにつけていくことを目標としている。

また、青木校長に「子どもたちに対し、井川に残ってほしいという思いはあるか」と尋ねたところ、次のような返答があった。「それは、子どもが大きくなってから子ども自身で判断すること。それよりも、社会や時代、場所が変わっても自立して生活していける子ども、また、一人前の社会人となって社会のために働く『意味ある人』として、立派に生きていける子どもを育てることが、学校教育において大切なことである」。青木校長からは、井川存続に対する願い以上に、子ども本人の成長と自立、そして幸せを願う思いが語られていた。

最後に、井川中学校の月見里茂希校長(50代)と岡村寿人教頭(40代)にうかがった話について見ていきたいと思う。

月見里校長と岡村教頭は、井川の子どもの特徴として主に三つあげて語ってくれた。一つ目は、感性の豊かさである。井川の子どもは地域の大人に面倒を見てもらいながら、その関係性の中で豊かな感性が培われるという。たとえば国語の授業で詩を作らせても、街の子どもと比べて詩にあらわれる感性が違うという。

二つ目の特徴は、少人数教育のため多くの人の中で自分を表現する機会が少ないということである。そのため、近隣の大規模校と交流を行い、多人数の中で自分を表現できる子どもに育てる取り組みを行っているということであった。

そして、三つ目は、地域とのつながりが深いということである。「子どもたちが地域の大人たちと一緒に草刈りや体育祭などの行事に参加していくことで、井川の子が『井川の子』になっていく。地域の大人たちが行事の際に率先して動き、準備や片づけをしている姿を見て、子どもたちも自然と自主的に動くことができるようになる」と、岡村教頭は語っていた。井川の子どもたちは、地域に見守られ、地域に育てられながら、成長していくのである。

加えて、小学校の教員2名、中学校の教員1名の計3人の教員の方に話をうかがうこと

ができた。ほとんどの教員は井川以外の地域から赴任して来たため、他地域、特に都市部の子どもとの比較の視点から井川の子どもの特徴を聞いてみた。すると、「井川の子どもはとても素直。でも、同学年の子どもとの関わりが少ないので、友達を増やしたいという思いはあっても大勢の子どもの前だと固まってしまかなか輪の中に入っていけない」という返答があった。

また、話をうかがった教員のうちの一人である、井川小学校に赴任して3年目の松田美代氏(20代後半)は、「井川の子どもすごいところは、7人という少人数だからこそできることを自分たちで考えて遊んだりさまざまな活動をしたりするところ。低学年の子は高学年の子を間近で見ながら成長していく。井川の子どもは、地域の大人たちからの愛情をたくさんもらっている。子ども自身も、学年が上がるほど地域の大人に見守られていると感じ、それは井川を出たときにも感じている」と語っていた。

この節では、以上のように第四の立場として幼稚園・小学校・中学校の教員の視点を見てきた。今回の聞き取り調査から見てきたものは、井川の教師は一教育者として子どもの成長と将来の幸せを願っているということである。特に過疎地域でありがちな「地域存続の担い手としての子ども」という見方をするのではなく、教育を通して子どもを一人の人間として立派に成長させようと努めている姿が見えてきた。子どもと関わる機会が多い教師であるが、同じようにその機会が多い地域・親とはまた違った教育者としての立場があることがわかった。まさに教師は「第四の立場」であるといえるだろう。(鈴木 久仁子)



写真10 松田美代氏



写真11 青木克顕校長

### 3.2 井川を巣立った井川っ子

ここでは、中学卒業まで井川で育ち、現在は他の地域で暮らす「元井川っ子」に焦点を当てる。

中学卒業後、高校に進学するなどして井川以外の地域に巣立った井川っ子たちは、どの

ような経緯で井川を出ることを選択したのだろうか。また、その後どのような人生を歩んでおり、井川やその未来に対してどのような思いを抱いているのか。こうした疑問を解決すべく、私たちは井川を巣立ち、現在街で働く B 氏（24 歳 男性）に話をうかがうことにした。その内容を以下で紹介する。

### 井川を離れた経緯

現在日本の高校進学率はおおよそ 98 パーセントと、ほぼすべての子どもが高校進学を選択するのが現状である。もちろん、井川の子どもたちにとっても高校への進学は当然のこと、という認識である。しかしこれまでも触れたように、井川には高校がない。したがって、高校に進学するためには、街に行くことは避けられないのである。15,6 歳で慣れ親しんだ故郷を離れ、親もとを離れて寮生活を始めるということは、やはり望ましいといえることではなく、この時点では多くの場合、「仕方なく」街に出て行くそうだ。今回、インタビューを行った B 氏は、高校卒業後、街の大学に進学し、街で就職した。就職の際には井川に戻るという選択肢もあったが、井川では職が限られてしまい自分のやりたいことができないということで断念した。また、井川には若者が少なく、遊ぶことができないという理由も大きいそうだ。私自身田舎出身であるが、若者が多く、娯楽施設や買い物をする場所が豊富な街は魅力的に映り、いったん街に出ると田舎に帰って定住しようという気持ちが薄れてしまうことは共感できる。これは多くの若者に共通していえることではないだろうか。まだ子どもの頃は「仕方なく」街に出たとしても、大人になるにしたがって、依然として仕方なくという思いもあるが、どちらかという「望んで」街に残るようになるという心境の変化が訪れることは自然なことではないかと思った。

### 井川への思いと今後

現在は街に住むことを選択している B 氏だが、やはり井川のことは好きだという。B 氏にとって生まれ育った場所、故郷であるからだ。故郷が「癒し」であり、「落ち着く」、「ラク」な場所であるというのは、井川出身者だけではなく、老若男女を問わず多くの人に共通して言えることであると思う。

そんな故郷であるからこそ、B 氏はいつか井川に戻りたいという。いつになるかはわからないが、目安としては 30～40 代になり、そしてそのときに就職先があれば、井川で働きたいと思っているそうだ。これは親や村のためというよりは、自分のためであり、やはり井川が好きだから生まれてくる思いであるようだった。

ただし B 氏の場合、井川で家庭を築こうとは思っていないそうだ。自分は故郷である井川で暮らしたいと思っても、嫁や子どもにそれを強要することは難しいかもしれないからである。特に、子どもには自分とは同じ思いをさせたくないと語っていたのが印象的だった。B 氏自身、井川での暮らしも高校生活も楽しくやっていたそうだが、やはり中学までの少人数制から高校の大人数制に馴染むまでは戸惑いも多く、母校の全校生徒が少ない

ということで友人からからかわれることもあったそうだ。本人はそれも嫌ではなく、すぐに馴染むことができたようであったが、やはり未来の自分の子どもに置き換えてみると、躊躇してしまうということであった。したがって、もし井川に戻るときに家庭をもっていたら、井川で単身赴任をし、休日街の家族のもとに帰る、という形をとりたいと語っていた。

井川の未来に関しては、井川出身者として何かしたいという気持ちはあるが、個人的にできることは今のところ思い浮かばないとのことだった。「元井川っ子」の同級生や後輩とも井川の今後について話すことがあるそうだが、その多くが B 氏と同意見だそうだ。この先も井川という地域が存続していくために、何か打開策があったらいいがなかなか難しい、という厳しい現実に対するもどかしい思いが見えた。井川を離れた今でも、B 氏のようにかけがえのない故郷である井川への愛着をもち続けることが、未来の井川を動かす力に変わっていくのではないだろうか。その足がかりになるものについては次項で述べたい。(川口枝里子)

### 3.3 井川よ、てしゃまんく魂へ還れ！

ここまで、少子高齢化・過疎化の進む静岡県の中山間地域の一つである井川について、特に今後の井川、ひいては日本の未来を象徴する存在である子どもたちに焦点を当てて見つめてきた。具体的には、子どもをめぐるさまざまな環境や価値観について調査を行い、述べてきたつもりだ。ここで再度、本論文の論旨を押さえた上で、私たちが出した結論を最後に述べていきたいと思う。

第一節では、井川の子どもをめぐる環境として、日本全体で見られる少子高齢化・過疎化のメカニズムについて触れた上で、井川における少子高齢化・過疎化の変遷について、具体的な人口の数値を出してみた。井川の場合、井川ダムの建設が契機となり、現在の状況に至っているということが考察からみえてきた。加えて、雇用環境の厳しさや交通の便の悪さも指摘していった。

また、高校がない、異年齢集団学習などの井川の子どもが置かれている特殊な教育環境についても合わせて確認していった。

第二節では、私たちが現地で調査をしていく中で見えてきた子どもをめぐるさまざまな価値観を、「地域の視点」・「親の視点」・「子どもの視点」の三つに分けて考えてきた。もちろん、人々が抱える感情は複雑多様であるため、明確に分類することは困難である。中には、それぞれの視点の特徴を兼ねるような価値観を持つ人も存在したことをここで補足しておく。

そして第三節では、二節では扱いきれなかった井川で働く教師の視点を「第四の立場」として取り上げ、さらに、井川出身者の視点を加えて説明してきた。

本論文で取り上げた立場によって、人々の考え方に違いはあるけれども、誰もが真摯に井川を思い、そして井川に生きる子どもたちを思い、力強く生きていることに変わりはない。

かった。そんな井川のために私たちができること、それは、井川の未来である井川っ子たちの思いを、井川に住むすべての人たちに届けていくことではないかと考えた。ここで、一つの詩を見てほしい。

青いみずうみ 緑の山  
自然が大好き 井川っこ  
夢にむかって つきすすむ  
未来の井川を守るんだ  
てしゃまんくのように やさしい人を めざして  
みんなの力をあわせれば できないことはない

これは、「てしゃまんくのうた」の歌詞の抜粋である。てしゃまんくとは、井川民話の代表的存在で、その昔、井川に生まれた力持ちで親切な、誰からも好かれる村の英雄のことである。足の速かったてしゃまんくが井川から駿府の町へ来たときには、石柱を軽々と持ち上げ、浅間神社の石鳥居を完成させてしまったという伝説も存在する。「てしゃまんくのうた」は、そんな英雄てしゃまんくをモチーフにして書かれており、てしゃまんくのような人を目指して力を合わせていこう、そうすれば何でもできるという強いメッセージがこめられている。この歌詞は、かつて井川の小学生が作詞したものである。すなわち、この歌詞には、井川の子もたちの井川に対する思いがこめられているということができよう。私たちは歌詞にこめられたこうした思いを「てしゃまんく魂」と呼び、今井川に必要なのは、まさにこの「てしゃまんく魂」なのではないかと考えた。



写真 12 真剣に答えて下さる望月倫久氏



写真 13 てしゃまんくの歌を歌う井川っ子

これまで、住民が知恵と力を合わせて取り組んできたことは、決して無駄ではない。そうした過去の努力の土台の上に今がある。しかし、井川の住民の中には現状に対するあきらめムードが広がっており、次の一步を踏み出しきれていないことも事実として見受けら

れた。今こそ、井川に根付く「てしゃまんく魂」へ再び立ち返っていく時ではないだろうか。

ある中学三年生の女子は、井川の未来に関して「外の人に任せるのではなく、まず自分たち（井川のすべての人）で何とかしていかなくてはいけないと思う」と語り、また、望月倫久氏(39)も「自分たちが（生活に困らずに）過ごすだけじゃだめ。子どもが帰って来られる地域を作らないとばちが当たる」と述べた。こうした発言から、老若男女問わず、住民の中にも井川の地域の一員としての責任を果たそうという強い意識を持ち続けている人々が存在することがわかった。

しかしながら、実際に地域を動かすということは言葉で言うほど容易くはない。望月倫久氏は、井川再建に関して「身の丈にあった運営」ということを強調していた。住民がいくら無理をしても結局は長続きせず、疲弊してしまうだけである。そこで、「がんばれる人には積極的にがんばってもらい、お年寄りや体の弱い人などには今までの生活に支障のない程度に協力をしてもらい、みんなで無理なくできる地域おこしをしていくことが理想だ」と語っていた。美しい景色やおいしい自然の恵み、あたたかい人々・・・こういった井川にしかない魅力や潜在的可能性を最大限に引き出し、井川を立て直していくためには、住民一人ひとりの強い意志と持続可能なアクションが求められているのではないだろうか。そんな井川に私たちが送る言葉、それが「井川よ、てしゃまんく魂へ還れ！」という私たちの結論である。(鈴木 誉子)

## 謝辞

最後になりましたが、今回の調査を通じてお世話になった、静岡市立井川幼稚園・小学校・中学校の皆様、そして調査にこころよく協力してくださった井川地域のすべての皆様に心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

## 参考文献

加藤菜々子

2010 「どうなる？井川の未来」『静岡市児童文芸作品集』 静岡市教育委員会学校教育課

鈴木久仁子

2011 「フィールドワークで初めて分かった過疎地域の可能性」『Financial JAPAN』 12月号 ナレッジフォア株式会社

長谷川昭彦

1997 『近代化のなかの村落 農村社会の生活構造と集団組織』 日本経済評論社

原俊彦

1994 「人口流出と少子化・高齢化の関係についての考察 -過疎化のシステム・ダイナミックス・モデルの構築その1-」『北海道東海大学紀要 人文社会科学系 第7号』 北

海道東海大学

松澤員子 編

2000 『講座 人間と環境 第7巻 子どもの成長と環境—遊びから学ぶ』 昭和堂

山縣文治

2010 『よくわかる子ども家庭福祉』 ミネルヴァ書房